

■『稲穂』発刊に当って

# 感動を語ろう、時代の心を伝えよう

平田 達

(中47回、在京飯田高校同窓会会長)

自分にとって、母校(飯田中学)は何だったのだろうか、と思い返すことがあります。ゲートルを巻いたまま校舎の屋上に正座をさせられ、小石が皮膚にめり込むほど長時間のお説教をされたこと、目の前で剣道場や柔道場の床がはがされ、学校が軍需工場に変わったこと、授業は毎日、労働が終わった後の二時間だけだったこと、そして戦地に向かう先輩たちを見送ったこと等々。学校生活は、今の高校生とは違って、強烈な戦争の足音の中での一日一日でした。

昭和二十三(1948)年に飯田中学を卒業し、大学に合格して上京することになったのですが、アルバイトの都合で卒業式にも出られず、その年の二月二十日に行き李一個を持って上京し、世田谷の医者の家で住込みの書生をするところから、東京での生活が始まりました。

そして、弁護士事務所の書生の時代、司法試験浪人の時代、恵まれない月日が過ぎて、いつの日か弁護士となり、それなりに自分としての生き方が出来るようになったと思えるようになるまでには、かなりの日時が経ちました。



平成五（1993）年に、在京飯田高校同窓会の会長になることを頼まれた時、「本当に自分でよいのだろうか」と、何度も迷いました。決断がついたのは、「平田先生は同窓会の事を大切にしてくれているからお願ひするんです」という後輩の言葉に、熱いものがこみ上げて来たことと、汽車に乗って一人で東京に出て来た日の熱い思いが重なって、自分にも何かが出来ると思ったからだと思います。

同窓会のために自分が出来るだろうか？ 何かが出来るとは思いません。同窓生一人ひとりを知る努力から始めました。話をすれば感動が伝わってきます。酒席を共にすれば感動は更に深まります。そんな一〇年が経過し、その間、沢山の先輩や後輩らとの知己を得て、私の心の中に沢山の《感動という宝物》が詰め込まれてきました。

この感動をより確かなものとし、私とだけでなく、同窓生それぞれが、年齢を超え、職業を超え、互いに人間として語り合い、感動の交歓が出来る場を持ちたいと思うようになりました。

在京同窓会誌を出したらどうだろうか。そこで会員一人ひとりの顔が見える対話が出来たら、また趣味の交歓が出来たら、どんなに素晴らしいだろうか――。今の時代に一番必要なのは、自分の生き様があって、周りの人のために何が出来なのか！そしてそれを後輩たちにどう伝えられるのか！ということだと思えます。まっすぐに生きて、感動をいっぱい語り合える同窓会誌にすることが夢でございます。

皆様のこれからのご声援に、すべてを懸けています。



●ひらた・さとし

昭和5年伊賀良村生まれ。飯田中学47回卒業。同28年中央大学法学部卒業、同34年弁護士事務所を開いて現在に至る。法律を扱わない事件の解決法を指摘す。著書に『心の種蒔き』がある。

右ページ写真右は、中学入学の頃、左は教練の一枚。